

# 「世界単位」と南アジア

高 谷 好 一

東南アジアを歩いていて、地域研究のためには「世界単位」という概念を導入すればよいのではないかということを考えるようになった。最初にその「世界単位」について簡単に話す。それから次に、そういう「世界単位」という視点で見た時、南アジアはどのように見えるのか、ということについても私見を述べる。後者については、私達東南アジア屋はいわば素人だ。インド専門家の方々から十分な御批判、御教示をいただきたい。

## I. 「世界単位」とは

ここで「世界単位」といっているのは地域的な範囲のことである。地球世界はどうなっているのか、その構造を把握するために、地球上をいくつかの地理的範囲に分割してみようというのだが、その分割された時の一区画、一区画を「世界単位」といっている。なるほど、国境というのがあって、それでもって、すでに地球世界はいくつかの部分に区分されている。

だが、これははっきり言って、あまりよくない。植民地列強によって、政治的に分割されたもので、人類史的に見ると、随分無理がある。一部の人達の利害のために恣意的に作り上げられた国家といった範囲ではなく、もう少し人類史的に意味のある区分けができないか、生態的にも文化的にももう少し落ちつきのよい区分けができないか、というのが発想の根本にあって「世界単位」というようなものを言い出している。このことは既に立本氏も説明した。だから反復しない。

ところで、この「世界単位」という考え方は、これを考え始めてから自分の頭の中でもかなり変化してきているので、それを素直に述べたい。そうすると「世界単位」の概念はかえって理解していただき易いのではないかと考えるからである。

## 1. 東南アジアで考えた「世界単位」

### 1-a 自然村分布域の確認 (stage 1)

東南アジアにはいろいろの生態がある。大湿原のデルタや鬱蒼とした熱帯多雨林、それに比較的乾燥した火山山麓、等々である。そして、それぞれの生態の上には、ちょうど、その生態に適応したような自然村が発達している。

例えば、デルタ。これはタイのチャオプラヤ・デルタを例にとると、次の通りである。広大な平坦地に文字通り一望千里の稲田が広がっている。木も何もない。稲田だけが広がっている。そして、時たま、その中に家の列が一行に続く。これは直線状に掘られた運河沿いに立てられ

た家の列である。

歴史的にいうと、デルタは極めて新しく人間生活の場に入ってきた空間である。チャオプラヤ・デルタの場合だと、1860年代に人間が住みだした。それまでは大湿原であった。より正確に言うと、雨季には全面が湛水して湖状になるが、乾季は全面が乾き上がるような、いわば両棲的な草原であった。1860年代になると、そこに運河が縦横に掘られた。すると、入植者がワットと押し寄せ、瞬く間にこの草原が一望千里の稲田になった。

入植者はいろいろの所からやってきた。彼等の文化的背景は違う。だが、誰も彼も食うために精一杯働いた。こんなわけで無秩序な中にも活気のある空間ができた。しかも彼等は、自分達こそは新天地を拓いた開拓者だ、という誇りのようなものも共有していた。要するに、ここには一つの世界ができたわけである。デルタの上でできた開拓民達の世界である。これはその周辺の世界とは全く異質のものだから、これを独立した一つの世界として、それを「世界単位」としよう、というのが私の発想の最初であった。

同じような発想で周囲を見渡してみると、そこには別の世界があった。例えば、ジャワの火山山麓。そこはデルタなどとは全く違って、カラッと乾いた空間である。だけど火山の高みから幾筋もの流れが落ちてきていて、樹木も豊かにある。要するに住むには理想的に思える環境なのである。そして、実際ここには古い集落がいくつもある。どれもこれもコンパクトに塊った集落で、しかもそれがよく手入れされた屋敷林の中に保護されている。屋敷林にはあらゆる種類の果樹があり、その下には野菜や葉草類が植わっている。それはそれは完成した空間なのである。そして、人々はそこで鄙びたなかにも、いかにも伝統文化に満ち満ちた生活をしている。

私は一度、そこの人達の生活の様子を聞いて、その文化の高さに驚いた。それと同時に、極めて強く世間体を気にしているその姿に、ああ、これは京都に似ているじゃないか、これじゃ大変だな、と思ったことがある。要するに、このジャワの火山山麓には、これまたその生態の上に適応した自然村が出来ており、そこには独自の社会が作られているのである。こうしたジャワ型の自然村の分布する所も一つの「世界単位」としていいじゃないか、というのが私の考えたことであった。

ジャワには比較的乾いた森が広がるのであるが、同じインドネシアでもスマトラやボルネオになると、もっと湿っていて、暗い森が雄大に広がっている。そんな所だとまた別の世界が広がっている。焼畑集落が点々と散在するのである。彼等の集落はジャワのそれに較べると、もっと小さく、いわば彼等は森に圧倒されて住んでいる。基本的には血縁集団を単位として集

住しており、ジャワよりももっと本音の付き合いをしている。森が広すぎるからだろう、彼等の間では、まだ森のカミガミや呪術といったことが信じられている。これは、また別の一つの単位である。焼畑地帯を一つの「世界単位」としてもよいのであろう。

こんなことを見てきた私は、ひとつの生態の上にはそれに適応した一つの生業が成立する可能性が大きいし、そうした所に住む人達は共通の社会を作り世界観を共有するようなことになるのではないかと考えた。この生態・生業・社会・世界観コンプレックスとでもいうものは、存在しそうなだから、それに目を付けて、そのコンプレックスを「世界単位」と呼んでみよう、ということにしたわけである。

#### 1-b ネットワーク型の世界単位の発見 (stage 2)

しかし、そのうち私は、自然村的な考え方だけでは処理し得ない集落や地方があることを発見した。結論から言うと、それはネットワーク型の世界とでもいうべきものである。

例えば、スマトラの東海岸にシアクスリンドブラという小さな港町がある。18世紀頃にはシアク王国の首都として大変栄えた所だが、今はもう本当に寂れている。でも、かつての繁栄を忍ばせる王宮と王のモスクだけは、そのきらびやかな姿をジャングルに囲まれて、今も突っ立っている。ジャングルの中に燦然と輝くその偉容は世界の七不思議の一つといってもよいかなと思うぐらいである。

ところで、この港の盛時のことを調べてみて私はびっくりした。これはシアク王国の都だったのだが、実際には地元の首長と外来の王と外来の水軍の長が協力して作り上げた合名会社の本社のようなものであったからである。この三者は元々はといえば赤の他人だったのだが、森林物産を搬出して儲けようじゃないかということで協力体制を作り上げたわけである。話のきっかけは後に王になる人が首長にこの計画を話したことである。この人は他国者なのだが、アラブ商人に太いパイプを持っていて、森林物産の売り捌きが出来るのである。この他国者が、「どうだ、君の輩下を使って香木を集めないか。集めたらそれを自分が売ってやる。儲けは山分けにしよう。」ということをしたのである。そこで話が纏まり、この異国人は王として首長に受け入れられる。首長と王は王宮とモスクを立てて、積出港の機能と外観を整えた。そしてこの積出事業を始めたのである。いよいよ事業を始めるとなると、もうひとり必要なものがある。武力を持っていないと、海賊にやられてしまう。それで、王になった人は強い海賊を見つけて来て、それを軍事担当重役ということで会社役員に引き入れた。三者は共同経営をすることになったのである。

このシアクスリインドラブラの場合、人口は一万数千人である。しかし、このように森林物産搬出が主目的であったから、農業は殆ど行っていなかった。食糧は基本的には他所から購入してくる。港だけがあるわけである。しかも、その港にいる人達は文字通りの寄り合い世帯である。共通の文化的伝統などというものは無い。それから、この港がそうであったように、多くは急にパッと出現し、資源が枯渇すると急激に寂れてしまう。そして、もっと儲けの大きい所に港は移ってしまう。シアクスリインドラブラの場合は、結果的にはそこから80 kmほど離れたスラットパンジャンという所に移ってしまった。スラットパンジャンは、今も極めてにぎやかな港として栄えている。そこには中国人が極めて多く、中国語が飛び交い、シンガポールとの交易が極めて活発である。

こういう港が、20世紀初頭ぐらいをとって見ると実に多かった。もっと昔をとってみても多かったのはまちがいない。トメピレスが『東方諸国記』に何十という港の記載をしている。この本が16世紀初頭のものであるから、そのころから、こうした港が、東南アジアの海岸には点々と散らばっていたことは間違いない。

ところで、これらの港は特定の生態を利用して農業生産を行い、それによって生きていくといった、いわゆる自然村型の集落ではない。単なる港町なのである。だが、この港町は、皆ある種の共通した性質を持っている。それは何よりもまず、交易に生きているということである。そして、その港町には雑多な人種の混住があり、混血が多いということである。人の出入りが激しいことも特徴である。だから、いわゆる土地固有の文化が育っているなどということはない。だが、勝れてコスモポリタンな所で、そのコスモポリタン性が共通した特徴になっている。要するに、こうした港には共通した性質があり、そこには港世界とでも言えるものがあるのである。

ところで、こういう港世界というものが存在するのだが、さて、それを地図上に示そうとすると極めて難しい問題が出てきた。同じような港が次から次へと現れてきて、その分布範囲が確定出来ないのである。シアクスリインドラブラのような港は東南アジアの海岸には無数にあるのだが、東南アジアだけでなく福建の海岸から、東シナ海の西縁に沿って、朝鮮半島に至るし、一方では沖縄から薩摩、対馬を経て日本海に入り、ずっと北上していき、函館や江差に至るという具合なのである。

こうなってくると、その分布は自然村のそのように、ある区域を限るというわけにはいかない。どこまでも無限に伸びていく。しかもそれは面的な広がりをなすのではなく、線状に伸び、線が交叉して網状をなすというようなことになる。こんなわけで、まともにその輪郭が示

しえないことになったわけである。こんなわけで、もし、これをも「世界単位」というのなら、それはネットワーク型の「世界単位」とすべきだということになったわけである。この型の世界は先の自然村型のものとは類型を異にする「世界単位」である。基本的な仕組みが違うのである。

## 2. 中国で見た「世界単位」(stage 3)

その後私は中国に旅をした。そしてそこでいくつかの異なった生態と、それに適応した人々の生活を見た。黄土地帯ではムギを作る農民を見た。黄土地帯を突き抜けてずっと西に行くと新疆省の砂漠に入る。そこはオアシスに出来た宿場町を見た。その北の内蒙古方面の草原では、パオを張って遊牧をしてまわる人を見た。逆に南へ行くと貴州や雲南では森が深く、そこでは焼畑をする人達を見た。人々が皆、生態に対応して、それぞれ別の形の生活を展開している様は東南アジアで自然村を見慣れてきた私には別に何の不思議もないことであった。

しかし、私は旅行中、ずっとある種の欲求不満を感じていた。何故かというと、そこには黄土の農民、オアシスの商人、草原の遊牧民、森の焼畑民はいるけれども、もし、それだけだとしたら、どこから中国というイメージがでてくるのかということに考えが到り、それが判らぬままに欲求不満を募らせていたのである。そんなある日、私は友人の中国人に、そのことを話してみた。すると、彼はいとも簡単に言った。「中国は立派にありますよ。儒教に縛られた中華世界というのがあるのです。毛沢東は儒教はダメだといいましたが、本質は儒教は今もあるのです。毛沢東は天子だったのです。天子を中心にした中華世界というのは今も厳然としてあるのです」。

私はその言葉で目から鱗が落ちるのを感じた。そうだ、黄土の農民、オアシスの商人、草原の遊牧民、森の焼畑民はいるのだけれども、それらの結節点に都があり、そこには天子がいる。そして、天子は儒教という実に勝れた統治の論理を持っていて、それで「中華世界」というものを作り上げている。そんなことを極めて強く感じたのである。

住民自体がそこに帰属意識を持つような範囲を「世界単位」とする、というように定義したのだから、本当は問題はそれほど簡単ではない。というのは、例えば、黄土農民をとってみよう。彼等は先祖から伝わる農地と宗族に帰属意識を持っているはずである。また同時に漢文化や中華世界の一員だとも感じているはずである。厳格に言うなら、そのどちらが強いかを確かめないと、彼等の世界などというものの範囲は決められない。そこには重層性があるのである。実の所をいうと、私はそれを確かめる作業は何もしていない。だから、本当の所はよく判って

いないのである。

しかし、それにも拘わらず、私には、どうもここには「中華世界」というものがありそうだという気がするのである。異質な風土を括り合わせて、より広い範囲を一つの意味のある空間にしている何物かがありそうだと、ということを感じざるをえないのである。それは、生態ごとに出来上がった小世界がバラバラに存在しているのとは全く違って、もう一段高次元な纏まりである。とまあこんなふうに思っているのである。

この広い範囲、すなわち高次の纏まりは、いってみれば、中華思想というイデオロギーによって括られてしまった世界である。イデオロギーの力が極めて強かったがために生態に立脚した個別性はいわば押さえつけられ、社会の深層に沈み込んでしまっている。そしてより高次の世界が浮かび上がっている。このことの発見は私には新鮮であった。巨大なイデオロギーが力でもって諸風土群を括っている、そして、そこには一つのヒエラルキーのようなものが出来てしまっている。このような世界は東南アジアの自然村地帯でも、港のネットワークの世界でも見られなかったことだからである。それで、私はこれは又別の類型の「世界単位」だと思うようになったわけである。

### 3. 地球世界全体で見ると (stage 4)

私は世界中を「世界単位」に分割してみようという考えを持っていた。そして、実際かなり早い段階から、すなわち、私がまだ自然村的な「世界単位」しか考えていなかった頃からそれを試みてみた。しかし、結果はいつも失敗に終わっていた。たしかに、世界中をいくつかのパッチに分割することは可能なのだが、地球全体の構造がうまく表現できなかったのである。

そのうち、失敗の原因が判ってきた。ネットワーク型の「世界単位」などを知らなかったからなのだということが判った。もう少し後になると、又別の類型のあることも判って来た。例の「中華世界」型のヒエラルキーのある「世界単位」である。こうした、全く異なった類型に属する「世界単位」があるのだから、それを最初から考慮に入れた「世界単位」分布図を作らないと意味がないのではないかと、ということに気がついたわけである。

そして考えてみると、この三つの類型は結局の所、大生態に規制されているのではないかとということにも考え到った。現在私が仮説的に考えているのは、次のようなことである。

①多点型「世界単位」……これはいわゆる自然村型の集落が、同一生態の上に広がっているような所である。これの特徴は森だのデルタだのという比較的個性的な生態が、まだ元の個性を生かして存在し続けている所に見られる。逆にいえば、社会は生態依存的であるということになる。そして、そうした社会は、しばしば生態依存的である分だけ自己充足的であり、孤立

的ですらある。ひとつずつの集落が社会の拠点であり、その拠点が無数に点在しているという感じがするので、仮に多点型「世界単位」という風に呼んでみた。

②ネットワーク型「世界単位」……これはすでにみたように海岸を幹線として広がっているものである。大河沿いにも点在していく。それと、砂漠地帯ではオアシスを連ねて港町と同じような町が連なっている。ネットワーク型「世界単位」というのは基本的には海と砂漠に関係しているものではないかと考えている。

③立体型「世界単位」……中華世界でみたように大きな範囲がイデオロギーによって括られており、しかも、全体はある種のヒエラルキーを形造っているような所である。点、ネットワークと並べて来ると、その構造は立体的に見えるので、仮に立体型「世界単位」としてみた。これは、生態基盤ということになると、「野」だとしていたい。かつての森が伐り拓かれて今は広大な農耕地の広がっている所、それを「野」といつているのである。こういう野だから人口扶養力は大きい。従って大人口が密集している。当然の成り行きとして、社会的規制が働かざるをえず、統治の思想のようなものが出てこざるを得ない。簡単にいうと、野では大人口が存在し、全体は文明化していくということである。

上のことでいいたいことは、「世界単位」の三類型は大生態に関係している、ということである。こういうことを考えたので、現在、私は世界単位分布図を直接描くよりも前に、まず世界の生態区分図を作ることになっている。そして、そのうえに、「世界単位」を載せてみようということになっている。このあたりの所は矢野暢編著『世界単位論』（現代の地域研究第2巻、1994、弘文堂）の中の私の論文「世界のなかの世界単位」を見ていただくとよい。本日配布したレジメの中の図はそういう考え方のもとに描いてみた「世界単位」分布図である。

最後に「世界単位」に関する説明を閉じるに際して、言っておきたいことは、私のいう「世界単位」の三類型は、それぞれに立本さんのいう三つの筋道（ベクトル）に符合しているということである。多点型「世界単位」は、「わける論理」がより強く利いている所である。ネットワーク型「世界単位」は、「つなぐ論理」の卓越する所である。立体型「世界単位」は「くくる論理」が強く働いている所である。私はそのように理解している。

## II. 南アジアをどう見るのか

さて、ここからはいよいよ無知をさらけ出して恥をかくことになるわけである。それに暴言を吐いて専門家を不快にさせるようなこともあろうかと恐れているが、どうかお許しいただきたい。地域研究の進展のためには、これが一つのやり方だと考えるので、あえて勇を振るって、

話題提供をさせていただく次第である。

ここで私が申し上げたいことは、先に私が説明したような「世界単位」という考え方で見た時、南アジアはどのように考えられるかということである。結論からいうと、南アジアは少なくとも二つの部分からなると考えたら良いのではないかということである。「インド洋世界」とでも呼べそうな部分と、「ヒンドゥー世界」とでも呼べそうな所である。「インド洋世界」としたいと思う所は西ガーツ山脈より西の海岸地帯である。ずっとパキスタンの海岸まで続きたいのだが、より典型的にはマラバール海岸を考えている。「ヒンドゥー世界」としているのはその他のインドの亜大陸部である。

## 1. 「インド洋世界」

私は1986年の大晦日をモンバサで過ごした。ここはアフリカなのだが、第一印象はパキスタンにそっくりだな、ということであった。泥かレンガの家なのだが、扉だけは厚い板で出来ていて、それに彫刻が施してあった。それを見て私はパキスタンを強く連想した。町の真中に大きなシバ神の寺もあった。町のいたる所で、強い香の香りがしていた。それがまたインドやパキスタンを連想させた。

私は夕方、Old port という所に行った。何艘かのダウが止まっていて、波止場には夕涼みらしい人が何人かいた。そのうちの一人に話しかけると、もうそろそろモザンビークから船が着く頃だから出迎えをかねて来ているということであった。

日本人かということで、そうだとすると、自分はマディヤのイスラームだと自己紹介して、「だけど、ここではマディヤは少なく、むしろグジャラティが多い」と付け加えた。そして、インドの話が続けた。風が良ければ、モンバサからインドまでは帆だけで一週間で行ける。そのかわり帰りはアラビア経由だ、といった話である。話を聞いていると、インドは本当にすぐそこで、この人など、まるでインドはほんのちょっとした対岸だ、ぐらいにしか考えていないことに気づかされ、正直いってびっくりした。

その後、家島さんの論文など読み、どうもアフリカ東海岸とインド西岸というのは本当に密な交易関係を持っていたのだな、と思い始めていたのである。そして、今回、同氏の『海が創る文明』（1993年、朝日新聞社）を読ませてもらって、そのところがより一層はっきり理解できた。ダウ船による交易が作り出したひとつの文化圏がここにはあるといわれる。家島さんの「インド洋」というのは、かなり広い範囲を含んでいて、特に、この両大陸の間の部分を家島さんは「インド洋西海域世界」といっておられる。



私がここで「インド洋世界」といって一つの「世界単位」としてはいかがだろうかと思っているのは、家島さんのいわれる「インド洋西海域世界」のことである。それは今もいったように立派な一つの「世界単位」を成す、と私は考えるのである。この海域の内容については後に家島さんに、直接お話いただけると大変いいな、と思っている。

一方、東南アジアの方では、我々はまた別途に海域世界というものを考えている。すでに少しふれたように、森林物産の積みだしを中心に発達してきた世界である。こちらの方では交易という経済活動もさることながら、社会組織などがより多く問題にされている。森と海が織りなす空間で出来る社会の性格などということが問題にされてきている。立本さんが、「わける論理」「つなぐ論理」「くくる論理」などということを書き出したのも、こういう海域での社会の特徴を出そうとされた過程で出てきたものである。そのうち、特に「つなぐ論理」と海域について、先ほど立本さんは詳しく話された。

随分昔になるが、私はマドラスから南下してコモリン岬に到り、そこからマラバールの海岸を北上したことがある。その時、コモリン岬を越えて、トリバンドラムに到った途端に、「これはインドじゃない!」と思ったことを今もはっきりと覚えている。その時、私は傲然と聳えるキリスト教の教会にびっくりした。私はまだヨーロッパを見たことがなかったのだ、「これはヨーロッパだ!」と思った。

だが、町を離れると今度は、「これは東南アジアじゃないか!」と思った。海岸には水田が広がり、何筋ものココヤシの列が続いていた。それはまさに東南アジアの風景である。インドの乾いた台地の風景とは全く違ったのである。それから、ちょっと、ガーツ山脈に近づき、そこを少し登ってみたのだが、そこはゴムとコーヒーが深い緑の樹々の間に至る所に見られた。コショウもあった。これも東南アジアの風景である。

マラバルまではどうも東南アジア的な海域世界が伸びてきているような気がしてならない。勿論、先にみたように教会などがあって必ずしも東南アジアにぴったりというわけには行かないのだが、それでも東南アジアとの関連は否定できないように思うのである。

西海岸もスラートあたりまで上がると、もう東南アジアなどという様子は全くなく、パキスタンやイランの海岸に続く景観である。それこそ、そのままモンバサあたりまで続いて行く港群ということになるのであろうか。こうして、景観的には二種類の海岸がありそうである。しかし、両方ともやっぱり、海域的世界として考えてみると良いのではないかとそのように考えている。

## 2. 「ヒンドゥー世界」

海岸部をのぞいたインド亜大陸を「ヒンドゥー世界」と命名したわけであるが、ここでは二つのことを考えてみたい。第一はこの「世界単位」の性格である。第二はその範囲の画定である。

### 2-a 立体型の「世界単位」

結論から先にいうと、「ヒンドゥー世界」というのは、先の私の類型でいくと、「立体型の世界単位」をなしている。「中華世界」と同じように、「くる論理」が重要な働きをしている「世界単位」である。

「中華世界」の場合は黄土のムギ作民、オアシスの商人、草原の遊牧民、森の焼畑民がいて、それらはそれぞれに、人口、富、武力、呪力といったものを持っていた。そして、その中央に天子がいて、彼が儒教という統治論理でもって、その四者を見事にくくっていた。「ヒンドゥー世界」もそれと似たような構造になっているのではなかろうか、ということである。

この「中華世界」の場合と較べられるような恰好で、「ヒンドゥー世界」の場合も模式的に示してみた。デカン台地が中央にある。そして、左肩にインダス河谷がある。ここは砂漠である。北縁はヒマラヤの高山帯で画されている。そして、このヒマラヤとデカン台地との間にガンジス河谷がある。ここは雨季には多湿になる沖積平野である。そして、こうした陸地全体を取り囲んでインド洋が広がっている。これがインド亜大陸の生態構造である。

さて、ごく初期、例えばマウリヤ帝国が出来る前ぐらいをとって見て、この生態がどういう文化史的意味を持っていたかということを考えてみたい。私はこういうことではなかったかと想像している。砂漠のインダス河谷は武力と情報の場であった。ここはアフガンやトルキスタンに開いていて、そこから武力を持った覇者が到来し、外部からの情報もどんどん入って来ていた。一方ガンジス平野は多湿で不衛生な所だけれども農業潜在力という点では大変大きな力を持つ所であった。ここは一旦、コメを作るとなればその生産力には抜群の可能性を秘めているからである。これに比べるとデカン台地は基本的には乾いた森林地帯であった。そこはカミガミや魔物の住む世界であった。だが、同時にそれを開墾して農地にすることもそれほど困難ではなかった。しかし、たとえ開墾しても、ガンジス河谷ほどに大きな農業潜在力はない。こういう三つの生態・生活区があるわけだが、それらが「ヒンドゥー世界」の形成には決定的な影響を及ぼした、と私は考えるのである。

「中華世界」がそうであったように、「ヒンドゥー世界」もこうした生態的セッティングの中で徐々に出来上がっていったのではなかろうか。中国の殷・周時代には砂漠・草原型文化の到来で一気に中原が変わった。それと似たような具合に、同じ頃か、それより少し早く、インダ

ス河谷にはアーリアンの到来があったといわれている。私はあの「雪山賛歌」を読んで実に楽しくなった。そこにはガンジスやデカンでは考えられもしないような、カラッとして曇りのない、そして大きくて強力な自然と、そこで生きる人達の姿を見たからである。私はリグ・ヴェーダのことを言っているのである。きっとあの頃は乾燥地文化を持った遊牧民達がインダスの砂漠にまできていたのであろう。そして一方では、そのすぐ東や南のガンジスの河谷やデカンの森には全く異質な、云ってみれば湿原と森の民達の小世界があったのであろう。

中国の秦・漢時代とその直前が大きな転機であったように、インドでもマウリヤの大帝国が出来る時代かその直前に大きな転機があったと見ることはできないだろうか。中国だと戦国時代に百家争鳴の現象が起こり、その中から儒教が採用されて、それが「中華世界」という凝集力のある世界を作り上げていった。私には「ヒンドゥー世界」も似たような現象を起こしているように見える。

この時期に関して私の想像していることは次のようなことである。

①砂漠出身の遊牧系武人達のフロンティアは、インダス河谷よりはさらに前進して、ガンジス河谷に入り込んでいた。

②ガンジス河谷のフロンティアでは急激な人口増と、都市の発生、権力の巨大化が起こっていた。

③そうして社会変化を受けて百家争鳴現象が起こっていた。

④百家争鳴の挑戦を受けて、天真爛漫な「雪山賛歌」も『マヌ法典』のような鍛えられ、隙のないものへ変質していった。

勿論マウリヤ朝が作られる時代だと『マヌ法典』だけが有力な思想であったというわけではない。むしろ、佛教などの方が権力者や都市住民にはより多く受け入れられていたと云われている。バラモン教でなくて、佛教であってもかまわない。ここで、私の云いたいことは、こういう段階になって、その人口増や商業的繁栄といった経済的な諸要素を縛り上げる強力なイデオロギーが出てきていた、ということである。

## 2-b 「くくる論理」としてのヒンドゥーイズム

「中華世界」には儒教という「くくる論理」があって、それがこの「世界単位」を極めて求心性の強いものにしていた。こういう視点からすると、インドでは「くくる論理」はヒンドゥーイズムであった。もっと端的に云うとカースト制度であった、ということを言いたいのである。すでに見たように、一時は佛教も盛んになったのだが、やがてさびれてしまう。佛教が何故「くくる論理」として強力に育ちえなかったのかということに関しては、私にはよく判らない。東南アジアではタイやビルマのように佛教が相当強力な力を発揮している所もあるからである。

この仏教の「くくる論理」としての有効性は又別に論じられるべきであろうが、ことヒンドゥーに関して云うならば、ここにはカースト制というものがあって、このカースト制の持つ差別の思想が統治に関しては極めて有効でありえたのだろうことを、私は考えている。

妙な話をするが、私自身は白状すると、やっぱり白人に対してはインフェリオリティ・コンプレックスを持っている。俺はあのスラリとした敵の容姿にはどのみちかなわない、向こうがモテるのは当たり前だ、ということをつつも感じている。だが同時にこんな風にも思っている。魂の問題になったらこちらの方が上ヤデ。外見的には劣等に見えるかもしれないが、心の問題になったらこちらの方が上や、などと思っている。例えば、同じパーティーに行ったとしよう。友人の白人は大モテにモテて満足して帰って行く。同じ会費を払わされた私は、あまり楽しみもしないで、しかし、怒りをぶちまけるわけにもいかず、無理をして、自分の心の中で辻褃を合わせて帰って来る。カースト制というのは基本的にはそんなものと関係しているのじゃないかと思うのである。そして、こんな風に考えるとカーストによる秩序というのは、私には何となく理解はできなくもないのである。

インダス都市文明を築いていた人達と新来のアーリアン系武人がどういう関係にあったのかは私には判らない。私が空想出来るのは、アーリアン達は「雪山賛歌」を歌っていたらしい、ということだけである。そして、やがて、この人達は東進し、湿原で米を作るオーストロアジア系の人達や、森を拓いてアワやシコクビエを作るドラヴィダ系の人達に出会う。その時の両者の関係は、私には想像可能なのである。多分、そこには大きな断絶があった。ガンジス平野やデカン台地の土着の農民達はその生業が泥っぽかっただけでなく、外見でも小さくて黒く、やっぱり見劣りがした。ちょうど、パーティーの私のような状態だったに違いない。一方、侵入してきたアーリアンの武人はパーティーの白人と同じということだったのであろう。

カーストは浄、不浄という観念で、人間をその生まれによって差別し、最も清浄なる者から、最も不浄な者へ序列化し、それを組織化したものだといわれているが、これも感覚的には判るような気がする。侵入して来たアーリアンは武人であったが故に、何でもなしえたわけであるが、こういう差別を正当化する論理を作り上げて、それを武力でもって繰り返し、繰り返す反復、実行させ、結果的には定着させていったのであろう。

武力を持ったアーリアンといったが、ここの所は、もう少し詳しく説明しないと誤解を招くのかも知れない。その前に比較をするために「中華世界」の場合のことを少し見ておきたい。農民、武人、商人、焼畑民を天子が儒教の論理でくくったわけだが、その際、天子は「仁」の考え方を特に重視した。「仁」とは多数を愛し、幸福にする心遣いだそうである。農民という

圧倒的多数を幸福にするためには、武人、商人、焼畑民を抑圧することも仕方がない、というのが「仁」の実践に当たっての理論だったようである。天子はこうして、少数だけれども自分と競合する潜在力を持つ武人や商人を抑えつけ、かくて統治を貫徹した、というのだそうである。ところで、こんな素晴らしい論理を常に強化し、実践していくために考え出されたのが科挙であり、その実務者として選抜されて来るのが、進士達である。そして、この進士達はいろいろの層から選抜されて体制擁護に力を発揮したのである。

これに比べると、ヒンドゥーの世界では様子は少し違うように見える。各層から選抜される進士に替わって、バラモンという社会層がある。これが、『マヌ法典』を論拠に、武力を持った王を正統化しこの二者が文武の力を合わせて、それ以外の人達を抑えつけている。彼等は生まれながらにして清浄であるが故に、生まれながらにして不浄なるその他の人達を抑え、指導するのが義務である、というのらしい。指導を受けるべき不浄なる者達がバラモン達の指示に従わない場合には来世ではもっと不浄な下層の一員として生まれ替わって来る、と説明される。圧倒的多数の農民や隷属民達はこうして、武力を持つ王達と、理路整然と語るバラモンのタッグマッチの前に圧倒され、縛り付けられ続けてきたのである。このようなことから、私は「中華世界」とは同じではないけれども、この「ヒンドゥー世界」には「くくる論理」がちゃんと立派に存在していて、それが多様な生態の上でそれぞれに異なった小世界を作る人達を縛り上げていたと感じているのである。

もう一言付け加えると、このヒンドゥー的な世界なるものは歴史を通じて、徐々に、しかし抗し得ぬ力を持って成長し続けてきたのではないか、ということである。バラモン達は歴史とともに、その論理そのものを肥大化させ、複雑化させた。とりわけそれは粘着力のあるもので、周辺の固有論理を取り込むような恰好で成長し、ひとたび取り込むと固結させ、もう逃れえないものにしてしまった。専門家の本を見ると、そのように書いてある。

この機構に関する私のイメージを示すと、こんな風になる。インド亜大陸という器には、元々、いろいろの個別文化があった。ガンジス河谷に住むオーストロアジア系のカミガミ、デカンの森にはいていたドラヴィダ系の人達が信じていたカミガミ。そして、それらのカミガミと共存する人達の個別文化があった。それらの存在のあり様は、先の私の言葉を用いると自然村的であり、立本さんの言葉を借りると、「わける論理」卓越型のものであったといえる。そういう「わけられていた」世界に、サンスクリット文化の攪拌棒（論理）が挿し込まれ、攪拌が始まった。攪拌棒からは不思議な粘着性の物質が分泌されていた。「くくる論理」である。そして、攪拌されるとサンスクリット棒の周辺の個別文化は次々と、粘着物質に絡めとられ、

サンスクリット化し、膠着していったのである。私は、こうして次々と膠着し、果ては団結していった部分を「ヒンドゥー世界」と考えているのである。

こういうものだから、「ヒンドゥー世界」というのはサンスクリット文化と個別文化の複合体である。あるいは化合物といった方がよいのかも知れない。そして、その複合体なる「ヒンドゥー世界」は時間と共に肥大していったということである。そして、それはもうかなり昔にインド亜大陸のほぼ全域を覆うことになった、とそのように考えているのである。

## 2-c 外縁は？

それでは、そういう構造を持った「ヒンドゥー世界」は実際にはどこまで広がっているのか。外縁はどこか、という問題がある。

時間がなくなってきたので、詳しくは言えないが、これに関しては、私は三つの視角からチェックして見てみると良いのではないかと考えている。北からの視点、南からの視点、これに、現時点の変化を重視するという視点である。

### イ. 北から見たら

インド亜大陸の北縁にはパキスタンとネパールがある。これをどう見るかということである。結論だけしかいえないが、私自身はパキスタンは別の「世界単位」にすべきだと考えている。やっぱり、ここでは人々がイスラーム教徒であるということを重視したい。

次にネパールだが、私はこれは一つの「世界単位」とはしない。ヒマラヤの高山部分はむしろ「チベット世界」に含めたい。前山からタライにかけての南部は「ヒンドゥー世界」に含めたい。ただ、ここで無視してはいけないことは、ネワールなどのことである。ネットワーク型の「世界単位」の線が、「ヒンドゥー世界」と「チベット世界」を縫うように走っていて、ネワールなどはそこに出来た世界と考えるべきなのではなかろうか。

### ロ. 南から見たら

南方から見るとするのは、別の言い方をすると、「インド洋世界」から見ると、ということである。マラバルは「インド洋」世界であるということは既に述べた。ところでこの「インド洋世界」をマラバルから北へはどこまで続けて行くのかは是非議論していただきたい。これには家島さんのお話を是非伺いたい。

スリランカだが、これは私は「インド洋世界」のメンバーだと考えている。

タミル・ナードゥというものは、これまた問題にしていきたい所である。私など、先ほどマドラスとトゥリバンドラムは全然違うなどといったが、その反面で、このマドラスを含むタミル・ナードゥもデカン台地やガンジス谷に比べると、これまた随分異質で、どちらかというと、海域的だなどと考えるのである。

#### ハ、現時点の変化を重視した時

こういう視点で私が気にしているのはバングラデシュである。バングラデシュを別の一つの「世界単位」とするかどうかということである。歴史的に見れば、ここを独立した一つの「世界単位」にする必要はない、と私は考えている。確かに昔からのイスラーム集住地であったが、さりとて独立したものとして取り扱う必要はなかったように思う。住民達も昔は独立など考えていなかったのであろう。

しかし、最近は違う。彼等は近頃では“私達はイスラームだ。イスラームはヒンドゥーとは全く違う”と言い出して、強烈に独自性を主張している。こうなると、私はここを独自の「世界単位」として認めたいナ、とそういうふうにするのである。

私がこういうふうにするのは「世界単位」というのはいわゆる「歴史地域」とは同じものにしたくないからである。「世界単位」というのは二十一世紀の秩序というようなものを考えた地域単位であるからである。二十一世紀には彼等はある意味ではもっと強くイスラームであるということを意識するのではないか、それなら、その彼等には彼等自身の「世界単位」を与えねばならない。そのように考えるからである。

以上が、私が考えてきた「世界単位」についての概念であり、その視点で見た時の南インドである。

